

加藤邦彦著 『中原中也と詩の近代』

正田雅昭

批評と研究なんていう図式は、もはや遠い時代の些末な対立構造に過ぎない……のだろうか。それならばそれで私個人としては一向に構わないのであるが、中也という詩人に携わっていると、簡単にそうとは済ませられなくなってくるのだ。

周知の通り、一九六七年から七一年にかけて刊行された中原中也の全集は、単なる一詩人の研究以上の重大な意味のある仕事であった。能う限りの客観性を模索したテキストクリティック、詩人の親族や知人に関する体系的な聞き取り調査、関連文献の徹底した調査など、後述する全集に与えた影響は計り知れない。

にもかかわらず、二〇〇〇年より四年にわたって新編全集が刊行されたことは、表面的な理由からすれば新資料が続々発見されたことによるが、その本質的な意義は、それだけの詳細な全集を受けた上での刊行であることだ。

当然、全集という作業に「決定版」などということはあり得ないわけだろうから、これから将来的にどんな資料の発見がなされるのかはわからない。しかしながら、新編全集の各巻に付属する解題編のデータは、恐るべき詳細さを持つて見るものに迫ってくる。

かつて、こういった全集の作業を行う側を「研究」、正確には「実証研究」と称し、そうした作家像の呪縛から逃れることが、「批評」

前者に関しては、たとえば「音楽性」をめぐる議論に関してなどに、その特質がよく現れている。詩の何が音楽性を感じさせるのかではなく、「音楽性」とは歴史的に何をめくって論じられて来た問題系なのかというスタンスは、その議論の錯綜を理解しながらも原理論的な考察から抜けられない私自身も含めた多くの研究者たちにとって多くの示唆を与えるものであろう。

後者に関しては、詩人の「実証」とは程遠い処にある私のような研究者から見ても、諸テクストが中也を通して時代に接続してゆく様は、テクスト論と作家論などという図式は本当はあり得ないのではないかと、という当然の反省を迫られながらも、一方では自分とは正反対の位置にあると思っていた加藤氏のスタンスが驚くべき近い位置にあることが、非常に興味深く感じられた。

そうは言いつつも、自分自身も比較的「実証」にこだわった「詩的履歴書」に関する論証は、教わるが多かった反面、詩人自身が自らの経歴を系譜化するにあたって「不特定多数に向けての」「活字化」よりも、「特定の誰かに見せる」ことを重視していたという結論は、自己の系譜化をはかった文章の意図としては、違和感が残る。

もちろん、我々のこうした議論自体が、作家論の範疇を出ないという事は承知の上だが、同じ作家を研究するファン同士の本音では、こういった議論が文学の楽しみであることも事実である……と矛盾を承知であえて言っておこうとも思う。

さらに、もう少し大きな問題として気になるのは、「字下げ」の「発見」をめぐる議論である。「字下げ」の意識が詩の活字化をめぐる経験の中で「発見」されたという加藤氏の指摘は、興味深くもあ

と見紛われる時代もあった。しかし、一詩人の制作背景を徹底的に調査することは、当然ながら一詩人の領域を遙かに凌駕するテクストへの接続を促すことになり、それが教養の「文学」の枠を超えた呼応に結びついた解釈を生み出すことを、今更ながら我々に教えてくれた全集であった。

筆者である加藤氏は、この新編全集の編者たちの作業を全般的に補佐した立場にあった。このことが、本書の構想を支えていることは、前述したような中也の全集の特殊性を考えれば、いくら強調しても強調しすぎることは無いだろう。

つまり、本書における加藤氏の実証研究は、単なる一詩人の思考過程を限定する作業では無いということなのだ。

本書の構成は、以下の通りである。

- 第一部 中原中也と音楽——詩人像の形成を視野に入れつつ——
- 第二部 中原中也への影響——愛唱をめくって——
- 第三部 中原中也と雑誌の関わり(Ⅰ)——詩篇の再掲を中心に——
- 第四部 中原中也と雑誌の関わり(Ⅱ)——第二次「四季」との關係について——
- 第五部 晩年の中原中也——新発見資料をもとに——
- 第六部 中原中也研究のこれから——今後の課題——

私が理解する氏の研究のスタンスは、詩人にまつわる言説が構築される過程そのものを「実証」することに加えて、詩人とその時代を追究しようとする「実証」にあると思われる。

「字下げ」の具体的な実践の「揺れ」が校訂過程から確認できたとしても、それを一回性の失われた「身体性」の代補として考えるのは、判断を保留せざるを得ない。その結論を受け入れるならば、実証的に論証される全ての「揺れ」が、同じレトリックで収斂されてしまう恐れがあるからだ。

ただし、こういった「字下げ」意識を含めて、字句の配置など視覚的な側面に異常な関心を持っていた中也の構成感覚が、原稿やパリアントの考証から再考されるべき余地が多いことは、非常に重要な指摘であろう。

また、パリアント比較に加え、雑誌媒体の意識をめぐる諸考察にも多くのことを学んだ。発表媒体と詩風をめぐる問題なども、一詩人の問題以上に、当時の詩誌の同時代的意義が逆照射される過程を目の当たりにした。

最後に、加藤氏が後書きに引用した『在りし日の歌』の「後記」の引用はとつても印象深い台詞である。恥ずかしいとは思いつつも、中也ファンのはしくれである私も自著の後書きで引用している。ただし、私はパロディ、加藤氏はもつと真剣な文脈であったが、こんなところに氏との近さと遠さを再発見したことも、蛇足であるが付け加えておいていいだろう。

(二〇一〇年三月三十一日 角川学芸出版刊 三九七頁 六〇〇〇頁)